

令和 5 年 6 月 25 日現在

機関番号：34411

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K20096

研究課題名（和文）協同学習モデルを適用させた情意・社会的領域の学習成果に対応したダンス授業の在り方

研究課題名（英文）The process of dance classes addressing learning outcomes in the affective and social domains by implementing a cooperative learning model.

研究代表者

栗田 昇平（Kurita, Shohei）

大阪体育大学・教育学部・講師

研究者番号：40759255

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、情意・社会的領域の学習成果に対応したダンス授業の指導及び学習の過程を明らかにすることであった。

研究成果として次の3点が明らかになった。単元序盤においてクローズドな課題設定を行うことにより、授業者や児童は快適さを実感し手応えを感じることができる。単元中盤から終盤において、段階的にオープンエンドな課題設定を用いてもコントロールの困難さを児童や授業者も感じやすい。オープンエンドな課題設定においては、学習のリソースの構造化を行ったり、学習課題の簡易化をしたりすることによって調整が可能であり、より成功裡な授業実践を導くことができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

我が国の体育授業における協同学習モデルの実践研究では成果の再現性の保証を求めて、仮説に基づいた成果検証型の研究デザインが多く採用されてきた。それは、体育授業にモデルを適用しさえすれば、期待される成果が円滑に得られるといった過度に単純化された図式で教授行為と学習が結びつけられてしまうといった懸念が生じる。そこでは適用に際して生じる授業者の葛藤や学習者の躓きといった諸相が捨象され、単純な入力と出力の関係で授業実践が描かれてしまうことにより、授業の再現性自体に疑問が残るものとなる。本研究では、適用過程そのものを描くことによって、それらの課題を乗り越えられる新しい授業研究の在り方を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to identify the process of teaching and learning in dance classes that correspond to the learning outcomes of the affective and social domains.

The following three points were revealed as the results of the research. (1) By setting a closed task in the beginning of the unit, the teacher and students can feel comfortable and obtain a good feeling for the task. (2) Even if open-ended tasks are used in steps from the middle to the end of the unit, students and teacher can easily feel difficulty in controlling the tasks. (3) Open-ended task setting can be adjusted by structuring learning resources and simplifying learning tasks, leading to more successful lesson practice.

研究分野：体育科教育学

キーワード：体育授業 協同学習 授業研究 表現運動 ダンス 質的研究 情意・社会的 ナラティブ

1. 研究開始当初の背景

我が国のダンス教育は、平成元年の学習指導要領の改訂以降、男女共習化、現代的なリズムのダンスの導入による種目の拡大、中学校第1学年及び第2学年での必修化と改訂ごとに発展の一途をたどっている。その理由として、ダンスのスポーツや体操とは異なった運動特性にある。現行の学習指導要領において、ダンスとは「交流を通して仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを重視する運動」とされている。近年、多様化する社会において若者に派生する心の健康の問題に対する解決策として体育授業におけるダンス教育が期待されているのである。

しかし、ダンス教育の急速な発展に起因し、ダンスが必修となった中学校を中心に教育現場では指導の困難さが叫ばれている。指導の困難さの要因として、ダンス授業の指導内容の不明瞭さや成果に対応した活動手順が共有されていないことが挙げられ、これらの改善と授業の質保証は喫緊の課題であるといえる。特に、交流やコミュニケーションといった情意・社会的な学習領域とダンス授業の活動の在り方については、これまで学術的なレベルではほとんど論じられてこなかった。その背景には、ダンス教育の運動特性上、情意・社会的な学習領域に対する教育的価値が当然視されてきたことが考えられる。本研究ではダンス教育に本来的に期待されていた情意・社会的領域の学習成果に対応したダンス授業の指導及び学習の在り方について検討することとした。

情意・社会的な学習成果を高める授業実践を企図して、本研究においては、「協同学習モデル」を採用する。協同学習モデルとは、学習指導の場面で「互恵的な相互依存関係」が促進的に働く性質を意図的に利用した学習指導方略の総称を指す。協同学習の適用に際しては、協同学習の5つの構成要素とストラクチャーと呼ばれる学習手順を導入することが奨励されており、本研究でもそれに則ることとする。協同学習を採用する根拠として、ストラクチャーと呼ばれる定式化された学習手順が存在するため、授業への適用にあたり再現性を担保できることが挙げられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、情意・社会的領域の学習成果に対応したダンス授業の指導及び学習の在り方を明らかにすることである。目的達成に向け、3つの課題を設定した。課題1は、協同学習モデルを適用させたダンス授業の計画の立案であり、課題2は、立案されたダンス授業の実践を行い、情意・社会的領域に関する学習成果がみられたかを調査すること、課題3は、協同学習モデルを適用させたダンス授業において、情意・社会的領域の学習の進行過程を調査し、成功裡な授業展開を導く要因を明らかにすることである。

3. 研究の方法

1) 検討課題1：協同学習モデルを適用させたダンス授業計画の立案

授業計画の立案にあたっては、体育科教育学を専門とする協同学習モデルの授業実践研究者及び同僚を専門とするダンス教育の研究者を中心に授業計画の素案を作成し、日本体育科教育学会のラウンドテーブルの場を借りて、多分野の専門家や教育現場の教員らの意見に基づいて改善手続きを行った。また、上述の手続きを経て作成した計画案を授業者に確認していただき、実態に基づいて調整を施した。

2) 検討課題2：協同学習モデルを適用したダンス授業の実践を行い、情意・社会的領域に関する学習成果を調査する。

小学5年生を対象に、2年間（2019年、2020年）にわたって協同学習を適用させた表現運動の授業を1年に1回ずつ異なる集団（1年目30名、2年目23名）に実施した。授業者は、同一の小学校教員（教職歴20年）であった。情意・社会的領域の学習成果の検証に関しては質問紙調査法を用いた。質問紙は、形成的授業評価（長谷川ほか、1995）、主張性・認知的共感性尺度（倉盛、1999）及び学級適応感尺度（江村・大久保、2012）を使用した。質問紙は授業単元の開始前と終了後に収集した。また、質問紙の結果に加えて、後述するフィールドノートやインタビューといった質的データによってトライアングレーションの確保を図った。

3) 検討課題3：協同学習モデルを適用させた表現運動の授業における情意・社会的領域の学習の進行過程の検討

授業実施前、実施期間中、実施後に授業実践者に定期的に行う半構造化インタビューと、フィールドノートの作成により質的データを収集した。フィールドノートの作成にあたり、ビデオカメラによって収集された映像音声を用いて書き留められた内容を再構成する工程を取り入れ、より信頼性を高めた。分析には、分析的帰納法を用い、本研究におけるダンス授業の情意・社会的領域の学習の進行過程を記述、構造化を図り、成功裡な授業展開を導く指導及び学習における要因を抽出する。

4. 研究成果

1) 検討課題1：協同学習モデルを適用させたダンス授業計画の立案

上述した手続きの上で検討した結果、表1の単元計画が作成された。

表 1. 本研究における授業の単元計画

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
オリエンテーション	1回目のジグソー		8×4拍の簡単な作品づくり ミニ発表会		動画視聴・見せ方の工夫について学ぶ	2回目のジグソー			最終発表会
	【2時間目】 エキスパート学習: ステップの習得(4種類) 【3時間目】 ジグソー学習: 学んだステップの教え合い					【7時間目】 エキスパート学習: 見せ方の工夫の4つ要素から動きを考える 【8, 9時間目】 ジグソー学習: ステップと見せ方の4種の工夫を組み合わせて発表作品を創る活動 作品発表に向けた練習			
	グループ活動の振り返りの時間(グループで話し合い、教師からの振り返り)								

ダンス授業において情意・社会的領域の学習を促進させるために、本研究では、協同学習モデルの適用した授業計画、下位教材の導入、下位教材から創作活動への段階的学習の3つの指導方法を導入した。

協同学習モデルの適用にあたっては、表2の5つの構成要素の手続きとジグソーのストラクチャーの導入を行った。

表 2. 5つの構成要素の手続き

協同的(互恵的)な相互依存関係の設定
・バンブーダンス(Jump Bands)の教材特性 ・ジグソー法による協同的相互依存性の設定 ・集団演技の発表という目標構造
グループ目標と明確な個人の責任の設定
・エキスパート学習で学んだことをジグソー学習で教える構造 ・集団演技の発表という目標構造
対面での課題に関連した相互作用を営む機会の確保
・エキスパート学習における相互作用機会 ・ステップの共有や作品づくりの際の相互作用機会
個人間、小集団内に必要とされる社会的技能の指導
・支援的雰囲気促進する学習指導 ・良い教え合いの仕方や振る舞い方などの共有
グループ活動の振り返りの時間の確保
・授業後の学習カードを用いた振り返り活動

表2は、本研究において用いた5つの構成要素の手続きを表している。本研究では、フォークダンスの運動素材として「バンブーダンス」を選択した。バンブーダンスとは、リズムに合わせて内外と打ち合わされる2本の竹の棒を躲すように跳びながら踊るフィリピン発祥の伝統的な踊りである。踊りを成立させるためには、棒を操作する者とそれを跳ぶ者の成功が必要であり、協同学習モデルの中心的要素である「互恵的な関係性」が運動に内在化されていたため本研究で用いることとした。また、ジグソーとは、アロンソンによって考案された、学習者が特定の1つの課題の達成に向けて、少人数の異質グループで活動する手法である(アロンソン・パトノー, 2016)。ジグソーの手法を用いることによって、学習者の全てが、協働的な学習

過程を通じて、課題全体を深く理解することができるとされている。

下位教材の導入とは、単元計画(表1)の2, 3時間目におけるジグソーを用いた4つの基本的ステップの習得の活動のことを指す。Barker and Quennerstedt (2017)は、ダンス授業の課題特性を「目的が予め決められていないオープンタスク」と表し、他の体育活動よりも曖昧で、ダンスの専門性のない授業者にとって困難を覚えやすいものであると述べている。その課題に際して、ステップの習得というクローズドな課題を用いて、理解し易い課題から入ることによって、授業者や児童にとって安心感のある授業進行が可能になると考えられる。また、本研究において適用されている協同学習モデルも不慣れな授業者や児童にとって困難を覚えやすいものであるとされている。単元序盤におけるクローズドな課題設定はその困難さも軽減し、スムーズな協同学習モデル適用を導くものであると考えられる。

の工夫の一方で、白水・小山(2021)は、ダンス授業によく見られるオープンな課題設定は、課題を構成する下位課題や必要となるリソースのコントロールが難しく、期待した学びを起こしにくい特性を指摘しつつも、「探求」を引き起こしやすく議論を発展させやすい特性を保持していると述べている。そのため、習得というクローズドな課題設定からオリジナルバンブーダンスの創作という段階的学習の過程を計画するに至った。

2) 検討課題 2: 協同学習モデルを適用したダンス授業の実践を行い、情意・社会的領域に関する学習成果を調査する。

2年間にわたる実践結果は次の通りであった(表3, 表4)。

表 3 . 2019 年の実践における形成的授業評価票結果

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目	8時間目	9時間目	10時間目
総合	2.90 (5)	2.91 (5)	2.93 (5)	2.91 (5)	2.95 (5)	2.93 (5)	2.96 (5)	2.92 (5)	2.94 (5)	2.97 (5)
成果	2.84 (5)	2.89 (5)	2.91 (5)	2.89 (5)	2.93 (5)	2.90 (5)	2.92 (5)	2.91 (5)	2.95 (5)	2.95 (5)
意欲・関心	2.95 (4)	2.98 (4)	2.95 (4)	2.95 (4)	2.97 (4)	2.97 (4)	2.98 (4)	2.95 (4)	2.97 (4)	2.98 (4)
学び方	2.90 (5)	2.90 (5)	2.95 (5)	2.91 (5)	2.97 (5)	2.95 (5)	2.95 (5)	2.93 (5)	2.93 (5)	2.95 (5)
協力	2.92 (5)	2.90 (5)	2.93 (5)	2.91 (5)	2.97 (5)	2.93 (5)	3.00 (5)	2.93 (5)	2.93 (5)	3.00 (5)

表 4 . 2020 年の実践における形成的授業評価票結果

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目	8時間目	9時間目	10時間目
総合	2.75 (4)	2.90 (5)	2.87 (5)	2.81 (5)	2.94 (5)	2.78 (5)	2.89 (5)	2.75 (4)	2.96 (5)	2.98 (5)
成果	2.67 (4)	2.83 (5)	2.82 (5)	2.78 (5)	2.92 (5)	2.74 (5)	2.88 (5)	2.81 (5)	2.97 (5)	2.98 (5)
意欲・関心	2.80 (3)	2.96 (4)	2.89 (4)	2.90 (4)	2.93 (4)	2.83 (4)	2.93 (4)	2.79 (3)	2.98 (4)	2.98 (4)
学び方	2.67 (4)	2.91 (5)	2.84 (5)	2.75 (4)	2.95 (5)	2.83 (5)	2.82 (5)	2.67 (4)	2.93 (5)	2.95 (5)
協力	2.91 (5)	2.96 (5)	2.98 (5)	2.81 (4)	2.95 (5)	2.74 (4)	2.89 (5)	2.71 (4)	2.95 (5)	3.00 (5)

表 3 及び 4 に示されている 2019 年及び 2020 年の結果をみると、その殆どの時間において評点（長谷川ほか、1995）が 4 以上と高い評価であることから、本研究における実践は、技能的な習得や活動量、協力場面の確保といった全体的な側面において児童に受け入れられていたことが伺え、一定以上の質が確保された授業であったことが推察される。

次の表 5 及び 6 には、本研究における実践の情意・社会的領域における学習成果の結果が示されている。それらによれば、2019 年及び 2020 年の両年において、学級適応感の居心地の要素を除いた主張性、認知的共感性、被信頼感、充実感の要素において単元を通じた向上がみられる。このことは、本実践が児童らの情意・社会的領域における学習として適切に機能したことを示しており、本研究における課題 2 の成果であるとともに、協同学習モデルの授業として忠実に実施できたことが推察される。

表 5 . 2019 年の実践における主張性及び認知的共感性尺度及び学級適応感尺度の結果

	人数	単元前	単元後	t 値
主張性	n=30	3.77±0.77	4.33±0.61	5.531**
認知的共感性	n=30	4.12±0.58	4.54±0.47	4.471**
居心地	n=30	3.47±0.70	3.63±0.63	1.934 n.s.
被信頼感	n=30	2.60±0.82	2.93±0.81	3.867**
充実感	n=30	3.28±0.70	3.55±0.58	2.682**
平均 ± 標準偏差				** : p<.01

表 6 . 2020 年の実践における主張性及び認知的共感性尺度及び学級適応感尺度の結果

	人数	単元前	単元後	t 値
主張性	n=23	2.99±0.95	3.62±1.04	3.463**
認知的共感性	n=23	3.26±1.06	3.81±1.26	2.914**
居心地	n=23	2.83±1.11	2.92±1.09	1.011 n.s.
被信頼感	n=23	2.11±0.86	2.37±0.84	2.958**
充実感	n=23	2.63±0.99	3.02±0.95	5.883**
平均 ± 標準偏差				** : p<.01

3) 検討課題 3 : 協同学習モデルを適用させた表現運動の授業における情意・社会的領域の学習の進行過程の検討

本研究における協同学習モデルを適用させた表現運動の授業実践は、授業者が常に手応えを感じつつ円滑に進行するような単純なプロセスではなかった。

次の図 1 は、2019 年の授業単元終了後に授業者に記述してもらった単元進行に伴う「授業に対する手応えの変容」である。

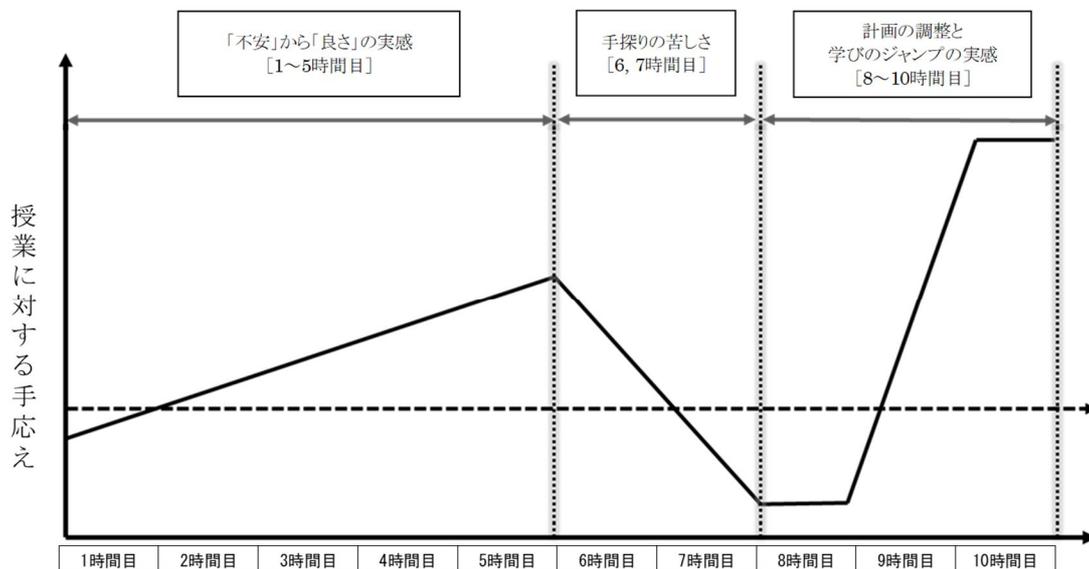


図1. 単元進行に伴う授業者の「授業に対する手応え」の変容

授業者によれば、単元序盤から中盤の1から5時間目では、4つのステップの習得という明確な学習課題の設定により、授業者も不安からの単元スタートではあるが、安定した授業進行と児童同士の活発な教え合いの実現を実感することができ、協同学習モデルの良さを実感することが出来た過程であったという。しかし、中盤の6,7時間目においては、2回目のジグソー学習が行われるにあたり、オープンエンドな課題設定やそれに伴う学習進行におけるマネジメントの決定が児童に任せられることになり、児童の学習が探索的になる出来事がみられた。この出来事により、授業者は授業に対する手応えを失い、困難を感じるに至った。児童の探索的な学習をみた授業者は8時間目から指示をより具体的にすると等の教師の学習における主導権を高めつつ、作品発表のルールを簡易化するという学習計画の調整を行った。それらの計画の調整が功を奏したことと児童が協同学習モデルの学習に適応したことによって、学習はより活発になり、児童の学習は教師の手を離れ、指示を出さなくても作品づくりに没頭する中でアイデアを出し合ったり、動いてお互いのアイデアを試したりと、より高度な次元で学習の自動化が起こった。このような授業風景を目の当たりにした授業者は、次の言葉を残した。

授業者：「学びのジャンプ」って言われていましたけど、学びの姿であったり、子どもたちが、こちらが考える以上に関わり合いであったりとか、色んなところの方向付けとかが上手くいって、この仲間、隊形、道具、移動っていうのもすごくマッチして、いい意味での子どもたちの裏切りっていうんですかね。すべてがマッチして、その中で柔軟な発想力が連鎖していったところがあって、最後の発表の集大成に繋がったかなって。
(単元終了後のインタビューより)

結論として、本研究にみられた協同学習モデルを適用させた表現運動の授業における情意・社会的領域の学習の進行過程の特徴として、図1の結果が示された。このことから、次の3点が指摘できる。単元序盤においても、クローズドな課題設定を行うことにより、授業者や児童は快適さを実感し手応えを感じることができ、単元中盤から終盤において、段階的にオープンエンドな課題設定を用いても、やはり学習のリソースのコントロールの困難さを児童や授業者も感じやすいこと、オープンエンドな課題設定による探索的な学習過程を確認した際には、児童の実態をみながら、学習のリソースの構造化を行ったり、学習課題を簡易化することによる足場かけをすることで調整が可能で、より成功裡な授業実践を導くことができることが明らかになった。

参考引用文献

- Barker, D. and Quennerstedt, M. (2017) Power and group work in physical education: A Foucauldian perspective. *European Physical Education Review*, 23(3): 339-353.
- 江村早紀・大久保智生 (2012) 小学校における児童の学級への適応感と学校生活との関連：小学生用学級適応感尺度の作成と学級別の検討。 *発達心理学研究*, 23(3): 241-251.
- 長谷川悦示, 高橋健夫, 浦井孝夫, 松本富子 (1995) 小学校の体育授業の形成的評価票及び診断基準作成の試み。 *スポーツ教育学研究* 14(2): 91-101.
- 倉盛美穂子 (1999) 児童の話し合い過程の分析 児童の主張性・認知的共感性が話し合いの内容・結果に与える影響。 *教育心理学研究*, 47: 121-130.
- 白水始・小山義徳 (2021) 質問研究の意義。小山義徳・道田泰司編, 「問う力」を育てる理論と実践：問い・質問・発問の活用の仕方を探る。ひつじ書房, pp. 3-22.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 栗田 昇平	4. 巻 68巻12号
2. 論文標題 協同学習モデルを適用したフォークダンスの授業	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 52-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 栗田昇平
2. 発表標題 小学校高学年体育における協同学習モデルの適用過程：情意・社会領域に焦点を当てた表現運動の実践
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	大西 祐司 (Onishi Yuji)	びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・准教授 (34205)	
研究協力者	濱本 圭一 (Hamamoto keiichi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------